

開発の波 市民が防ぐ

貝塚 特別史跡へ 加曾利貝塚

【中】

貝塚（東京都）を米国の学者エドワード・モースが見つけてから10年後。多くの人類学者や考古学者が加曾利貝塚の発掘に訪れ、大正時代には貝塚研究の重要な舞台の一つとなった。

しかし、戦後の高度成長期、一帯では宅地造成や工場建設などの計画が持ち上がった。すでに一部の場所では樹木の伐採や杭打ちが行われていた。

「加曾利貝塚」の存在が学界で初めて紹介されたのは、今からちょうど130年前のことだ。

「下総国千葉郡介墟記」——。1887（明治20）年、東京人類学会の学会誌にそんな論文が載った。日本の考古学発祥の地、大森

大きな危機を前に、市民たちが立ち上がった。

ようで、「殿さん」と呼ばれていた。鷹揚として、穏やかで、生徒を叱ることはほとんどなかった。

貴重な遺跡であることを

広く伝えようと、発掘調査後の約1カ月間、地層の断面は市民に公開された。市民有志は63年に「加曾利貝塚を守る会」を設立。千葉駅前などで保存を求める署名活動を展開し、計1万人分を超える署名を集めた。

市は64年、北貝塚を含む一体を買収し、66年に市立加曾利貝塚博物館が開館。その後、南貝塚の買収も始

めた。71年に北貝塚、77年に南貝塚が国の史跡にそれぞれ指定された。

「普段は物静かな人。でも、貝塚見学のバス旅行ではマイクを握り続けて、ず

1つと解説をしていた」。守る会の後継団体で武田さんと関わった久保勢津子さん（74）は、武田さんのそんな姿を思い出す。

武田さんは2001年、87歳で亡くなった。

国の文化審議会は加曾利貝塚の特別史跡指定について、文部科学相への答申で「昭和30年代後半期に全国展開した保存運動は埋蔵文化財保護の歴史を代表するもの」と評価した。貝塚の断面を観察できる整備手法や博物館など埋蔵文化財の活用についても「先駆的存

在」とした。武田さんの情熱は地域の人たちに引き継がれた。周辺の森や近くの坂月川両岸は、縄文時代の森と水辺の姿をいまに伝える整備が続けられている。（熊井洋美）



1964年の発掘調査の様子。市民向けの見学会も開催された



⑤ 武田宗久さん（90年ごろ）

⑥ 千葉駅周辺で行われた保存の署名活動（63年）
いずれも千葉市立加曾利貝塚博物館提供

